

永田英理著 『蕉風俳論の付合文芸史的研究』

中 森 康 之

画期的な本だと思う。

けれどもそれをうまく説明するのは難しい。その理由はいくつかあるが、ともかくやってみよう。

まずは本書の目次をあげておく。

第Ⅰ部 蕉風連句の分析とその方法

第一章 蕉門の式目・作法観

第一節 蕉門の式目観——許六と支考——

第二節 『去来抄』『故実』篇にみる式目・作法観

——連歌式目と俳諧式目——

第二章 「恋離れの句」考

第三章 連句一卷総評論

第Ⅱ部 支考の「七名八体」説の付合文芸史的考察

第一章 座の文芸理論

——支考の「七名八体」説の浸透と変質——

第二章 蕉風連句における「有心付」の検証

——「有心付」は「句付」にあらず——

第三章 蕉風連句における「起情」の手法をめぐって

第四章 蕉風俳論における付合用語としての「会釈<sup>あしやく</sup>」の変遷

第五章 「色立」という手法

第一節 「色立」の付合文芸史的考察

第二節 色彩表現と俳諧

——「色立」の手法の転用をめぐって——

第六章 「拍子」考——句調論から付合論へ——

第Ⅲ部 蕉風発句論への視座

——「題」「本意」と「実感」「実情」と——

第一章 蕉風俳論における「本意」の一考察

第二章 「題」の俳論史——詞の題、心の題——

第三章 詩人芭蕉 感性の覚醒

——発句表現における「触覚」のはたらき——

まず確認しておかなければならないのは、著者の研究における本書の位置づけである。学位論文であり、研究史上も大きな成果を上げている本書は、なんと著者にとっては、基礎作業に過ぎないのだ。何のための基礎作業なのか。「連句の作風研究」である。著者は、「国際的な視座」に立った「詩学」としての「蕉風連句の作風研究」という壮大な構想を持っている。ところが、「その研究・分析方法について、いまだに有効な方法論が見出されていない状況にある」。だったら一から自分でやるしかない。

そこで、本書において著者は、広く俳論や作法書によって作句理論を確認し、その理論を応用しながら実作品を分析してゆくことが、連句の研究方法として有効に働くのではないか

と考えた。すなわち、連句の作風研究のためには、まず付合論の分析に取り組むことが肝要なのである。

と述べ、本書を「蕉風連句の作風研究のための基盤を形成する」ためのものであると宣言しているのである。

ではその基盤形成の試みによって何が明らかにされたのか。

## 二

本書の特徴は、何と言っても扱っている資料である。歌論、連歌論を視野に入れつつ、膨大な「広義の蕉門系伝書類を博搜し」た上で、その史的展開を丁寧に辿っている。これまで、これだけの伝書を含む俳論を調査し、その系統と史的展開を辿った研究はなかった。本書を読むと、これまでの研究が、伝書を軽視し、どれほどいい加減な思い込みをしていたかがよく分かる。その証拠に、「有心付」と「匂付」が同義でないこと、「色立」は「俳文学大辞典」などが規定しているような……手法のことではない」こと等、通説が鮮やか（かつ穏やかに）覆されてゆくのである。

それだけではない。伝書の博搜から浮かび上がってきたのは、他ならぬ支考の存在である。支考と言えば、芭蕉が言ってもないことを捏造したという悪評が現在でも根強い。しかし本書は、それが根拠のない思い込みに過ぎないことを明らかにする。例えば、支考の式目観は「芭蕉の式目観に近いものであり、

支考の立てた『二十五条』は、長い間、いづれかといえは否定的な評価を受けてきたのだが、このように、大局的には他の蕉風俳論における説との整合性が認められることから、む

しろ芭蕉の教えに基づいたものであり、他の門人たちの認識から逸脱したものでは決してなかったといえよう。

と言うのだ。そして今日の支考批判の根拠ともなっている越人の支考批判の方が、むしろ正当性を欠くものであるとする。

また支考が考案した「七名八体」説についても、

「七名八体」説としてあげられているこれらの用語および概念は、支考がまったく独自に発明したものではなく、その大半は、歌論・連歌論にその淵源が見出せるものであったり、芭蕉の言説に基づいていたものであることが明らかになっていく。

さらに、式目作法の当座の捌きについて、「支考は去来よりもの確に芭蕉の真意を理解していたのだ」とまで述べている。去来といえ、従来支考とは対照的に温厚篤実とされてきたのだが、しかしむしろ『去来抄』『故実』篇の方が、「それまでの連俳に対して蕉風俳諧の独自性というものを印象づけるために、さまざまな仕掛けをしている」らしいのである。つまり本書で提示されているのは、従来とは逆の、歌論、連歌論を踏まえ「芭蕉の説を反映させようとする姿勢をとっていた」誠実な支考像であり、蕉風の独自性を印象付けようと思図する去来像なのである。

## 三

次に実証されているのは、その支考俳論、とりわけ「七名八体」説の圧倒的な享受とその具体相である。例えば「会釈」。この言葉自体は、連歌論や支考以前の俳論にもある。しかし、

それ以前から用いられていた「あしらひ」という語は、支考の「七名八体」説における「会釈」の提唱を境に、以後、おおかた支考流の「会釈」の概念に準じて用いられていったことが判明した。

評者は以前、俳論における滑稽意義が、支考を境に一変することを指摘したことがあるが、それと同じことがここでも起こっていたのである。「拍子」も同様。

では「起情」「色立」はどうか。これは支考が作り出した概念である。その概念でもって作品を振り返ると、連歌にもそれに相当するものがある。しかし、

「起情」という用語そのものについては、管見では連歌論書や支考以前の俳論書には見出すことができない。おそらく、連句の付合用語としては、支考によって初めて作り出された用語であるとみてよい。

「色立」も同じ。

連歌においても、色彩を介した付合の手法は多用されており、同様の類例は多数みられるのである。ところが、……主な連歌論のなかには、これに類する手法を、名目として確認することができない。このような手法を「色立」という呼称をもって、はじめて付合手法のなかに体系化したのは、近世俳論における芭蕉の門人である支考であった。

そしてこれらは、誤用と転用を飲み込みながら、支考以降の俳諧史に圧倒的に享受されてゆくのである。

#### 四

ところで、この引用からも分かるように、著者が細心の注意を払っているのが、論と実作の関係である。本書は「俳論とはあくまでも実作のための理論である」という明確な見解のうえに立ち、「論と実作を縦横に駆け巡る。そこで浮上するのが、「色立」等に見られる、実作における付合手法とその概念化の問題であるし、逆にその概念が実作に及ぼす影響でもある。また、例えば『宇陀法師』の「恋離れ」に関する言説が、「蕉風連句の作品から帰納され」たものではないといった問題である。

そして何より忘れてはならないのは、俳論が持っている作品解釈の有効性である。「色立」でも、概念自体の是正だけでなく、それにより従来の解釈の誤りの可能性にまで言及している。

もちろんこれは、作風研究を志す著者にとっては、あたり前のことだ。本書でも作風への関心は常に払われている。

例えば「起情」の考察から浮かんできたのは、

連歌と蕉風連句の句の運び方をみてゆくと、蕉風では、景気の句の詠み方という点においては、蕉風以前の俳諧よりもはるかに連歌に近い作風になっていると考えられる。……蕉風連句においては、かなりの程度で連歌と共通した作風が形成されていったのである。

ということであるし、「拍子」の分析からは、「蕉風で一度は淘汰された「詞の拍子」を重視する宗因流の俳風が、百年近くの時を経て再び流行し始める動向」が明らかにされる。

さらには、著者の視野には、座の性格の変容という問題も入っている。つまり、連句から発句へという「俳壇全体の関心」の变化である。それに呼応するかのように、本書は、第Ⅰ部の連句論から出発して、第Ⅱ部で論の史的展開を辿り、第Ⅲ部では独自の発句論を試みるという展開となっている。

## 五

さて、「付合文芸としての連歌や連句の作風研究は、いまだにその基本的な方法論が確立されていない」。それ故、「支考の」七

名八体」説において説かれている付合理論を、連歌・俳論史的に検証してゆく」という場所から出発した本書は、どのような地平にたどり着いたのか。それはまだ分からない。著者自身が自分の関心の核をよりはっきりと掴んだとき、すなわち著者の独自性が遺憾なく発揮されたとき、本書の意味は、著者自身にも、また読者にも真に開かれるだろう。

その答えは、著者自身の今後の研究が明快に語ってくれるはずである。

(二〇〇七年二月 ぺりかん社 A5判 三三六頁 税込六三〇〇円)

## 新刊紹介

雲英末雄監修

『カラー版 芭蕉、蕪村、一茶の世界』

本書は、芭蕉、蕪村、一茶という俳諧史において最も著名な三人の業績を軸に、江戸から明治に渡る俳諧の歴史を辿るものである。しかしそうした題の一方で、既成の

文学史に囚われない、この三人を生み出した土壌である当時の広く豊かな俳諧の世界を紹介するという姿勢が感じられ、それは序章で示された「俳諧の形象史」というのが本書のひとつのテーマであることからわかる。オールカラーでふんだんに用いられた俳書や摺物、色紙、懐紙などの図版は、俳諧には活字で読むだけではわからない、別の世界があることを伝える。美しく、楽しいそれらは読者に新鮮味を感じさせるで

あろう。芭蕉、蕪村、一茶だけでは語りつくせず、また文学性だけの評価では終われない、江戸の俳諧とは一体どのようなものだったのか？誰がどのように楽しんでいたのか？そういった俳諧のありのままの姿を知るための一冊である。

(二〇〇七年五月 美術出版社 A5判 一七六頁 税込二六二五円)

〔手嶋千賀子〕